

第5章 まとめ

今回重症心身障害児者の地域生活モデル事業から「地域」をテーマに事業を振り返ると、まず連絡協議会では専門性の高い機関から地域性の強い機関まで幅広くに参加していただいた。実際のところ2回のみで開催となってしまったが、今後継続的に協議会を開催することができれば、それぞれの機関の理解が深まり、連携することができるのではないかと思う。

実態調査では家族は主たる介護者（ほとんどのケースが母親）が健康であり、子供の状態が安定しているならば、家族の協力を得ながら、サービスを利用しながらこのまま在宅生活を続けたいと考えていることが分かった。そしてそのためにも一層のサービスの充実を図って欲しいこと、および地域の人々にも子供のことを知ってもらいたいと考えていることが分かった。地域の人々に知ってもらうためにも協議会等の連携が必要ではないかと思う。

相談支援事業所へのアンケート調査からは、専門員から見て重症心身障害児者とその家族の生活の質の向上として、医療福祉など専門職の連携だけでなく、地域の理解や連携を深めていく必要があると考えていることが分かった。

療育キャンプでは、家族間交流を深めてもらい、きょうだい支援となると共に、大学生ボランティアの参加により、キャンプ自体がより賑やかになると共に、重症心身障害児者の理解にもつながった。中にはこれまで自分には何ができるのかずっと分からず、学校では目立たずにいた学生が、障害者との出会いを通じて自分自身の可能性を見いだしたケースもあった。障害者の一方的な理解だけではなく、相互に与えあえることができ、とても良い機会となった。

地域セミナーでは、約350名の地域の人々に参加していただいた。講演会、パネルディスカッションを通じて障害者について多少なりとも理解していただけたのではないかと思う。しかしその後の映画会で60名の方々に参加していただいたが、その多くが障害者に関わっている人々であり、やはり地域の人々の理解を促進することの難しさも感じた。大がかりにするだけでなく、コツコツと継続して取り組んでいかなければならない課題であることを実感した。

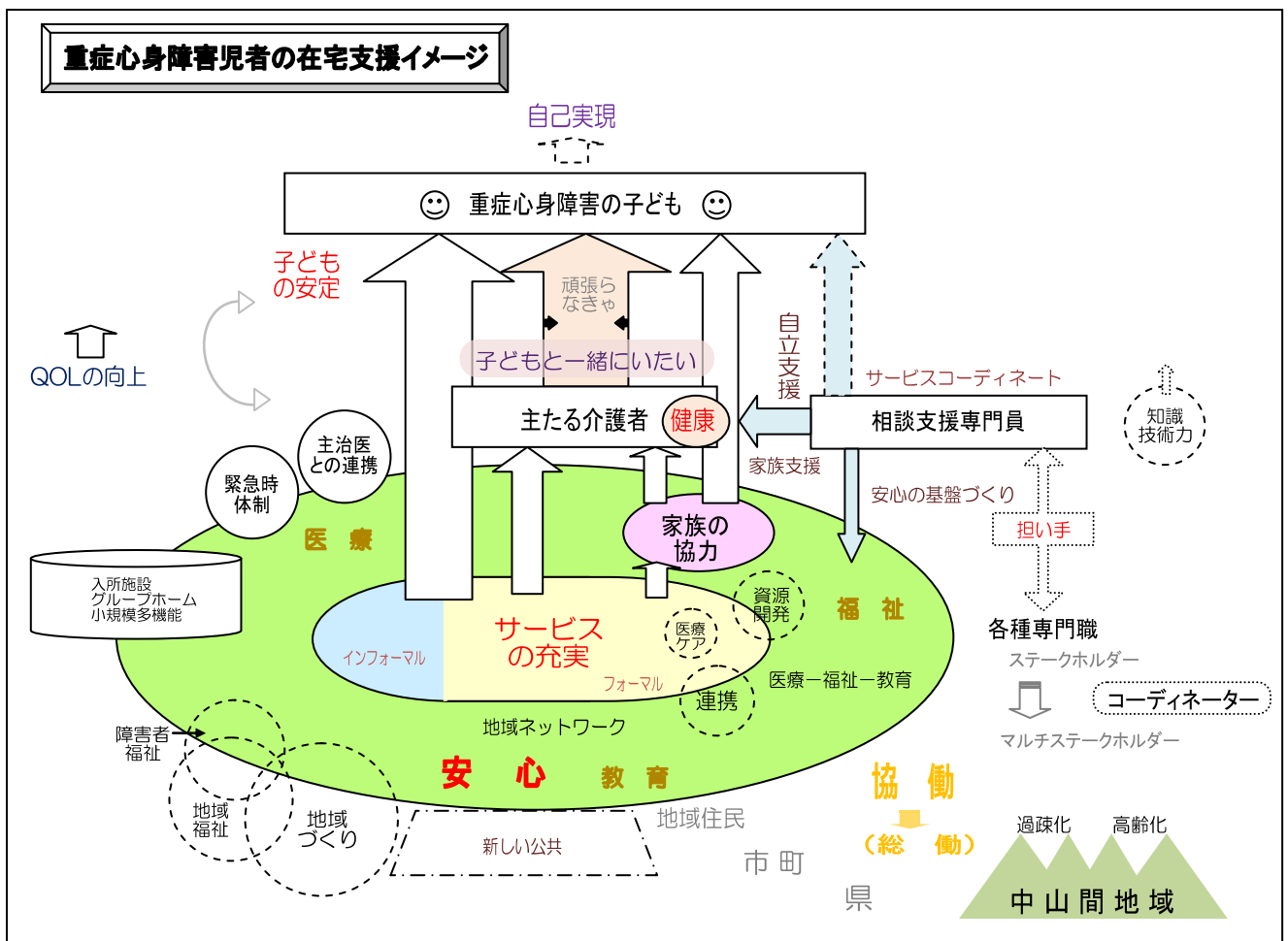
以上の結果を通じて、地域に障害者への理解を進めていく必要があると思うのだが、それでは一体誰がどのように行うかという問題になる。現在南予でネットワークを形成しようとしているのは相談支援専門員であり、彼らの集まる自立支援協議会や南予相談支援事業所連絡会では、それぞれ課題の共有や問題事例の共有等を行っており、横の分野における連携をとっている。相談支援事業所のアンケートから重症心身障害児者への取り組む意欲も持っている。まずはこの自立支援協議会や連絡会での連携の強化、あるいは地域課題の共有が必要ではないだろうか。

そして更に今後必要とされるのは縦（異職種）のつながりであり、幅広い分野の専門家たちと協働することではないだろうか。ひそのひとは医療と福祉更には行政機関等の協働であると思う。それらの連携を通じて重症心身障害児者に対応できるサービスを増やしていくことが必要である。そしてもうひとつがより広い範囲の機関間での協働であり、それを通じ地域の理解を広げ、インフォーマルな部分で彼らを支えていくことが必要だと思う。

協働とは目的を共有し、それぞれの機関（関係者）が対等な立場で、それぞれの強みを活かせるところで役割分担し、責任をもって実施し成果を上げていくことである。それによって単独で実施するより

も、より大きな成果を得ることができる。1プラス1が2ではなく3や4にもなりうる。例えば今回実施した連絡協議会を定期的で開催し、重症心身障害児者とその家族の状況や思いを共有すると共に、相互理解を深めていき、そこから縦の連携を広げていくことが有効かもしれない。

今回重症心身障害児者の在宅生活の支援事業を通じて、様々な課題が現れると共に、より良い在宅生活を送るための可能性も見えてきた。南予地域は過疎高齢化が進みつつも、さまざまな分野におけるエキスパート（専門家）はいる。彼らはその分野においては多くの経験と実績を持っている。その人たちが連携することができれば、幅広い分野をカバーすることができる。そこであえて必要とする人材を上げるならば、様々な職種同士での協働、そしてそれらを地域に組み込むことを可能とするデザインを描けるコーディネーターが必要なのではないかと思う。



終わりに

福祉が氾濫している。家から外に出れば何台もの福祉関係車両とすれ違う。また自転車や車で走れば多くの福祉施設を見る。それらのほとんどが高齢者福祉のものであるが、時々障害者関係もある。どちらにせよその増え方の急激さには驚くばかりである。一体どれだけの社会保障費が必要なのだろうと思う。

ところで福祉とは「幸福」や「豊かさ」を意味している。福祉の「福」は幸福の福であり、幸せを意味する。そして福祉の「祉」は、これもまたしあわせを意味している。「福祉」とはすなわち「しあわせ」という意味が重なりあった語である。

ところでこれが「社会福祉」となると、ハンディキャップのある人へ介護保険、障害者総合支援法、生活保護法などの制度上の施策を利用して援助するという意味となる。では何を援助するか。現在の社会福祉が援助するのはその人の自立である。それでは自立とは何か。自立とは自ら主体的に生きるということである。制度を利用して自ら主体的に生きていけるようになるために自立支援を行う。では自立した先に、主体的に生きていく先に何があるのか。それは自己実現である。社会福祉はその人の自立を支援して、そして自己実現を果たしてもらおうのが役割である。それでは自己実現を果たしたその先には何があるのか。自己実現を果たした先には「しあわせ」「豊かさ」がある。もっと簡単に言うならば「満足」や「充足」がある。つまり社会福祉の目指すところは、制度を利用して、自立支援を行い、そして自己実現を果たしてもらい、しあわせになってもらうことである。そこに社会保障費の「福祉」に関するものが充てられている。そのため社会保障費自体は必要なものである。けれどもそれがパンク寸前であるのが現状である。

映画「普通に生きる」に出てくる人々の信念は「どんなに重い障害を持っていても、本人もその家族も普通に生きてゆける社会をめざす。」ということである。普通に生きるという言葉と置き換えると「幸せを目指して生きていけること」と言えるのではないかと思う。

ところで「しあわせ」を目指している人々は、そのようなハンディキャップを抱えた人ばかりではない。一般に健常者と言われる人々もそうである。幸せになりたいと思っている。不幸になろうとして生きている人などいない。障害者と呼ばれる人達、その親たち、そして健常者（と呼ばれる人々）もしあわせになりたいと思っている。この世に生まれた人々は誰もが幸せになることを願っている。

では何を持って幸せかという、人それぞれによって違うと思う。例え同じひとりの人でも年齢や経験などその時々によって変わってくると思う。けれども一つ共通することとは「充足している」「満ち足りている」という気持を持てるかだと思ふ。

現在各地で地域おこし、あるいは地域づくりが盛んになっている。各地でそれぞれ地域を少しでも良くしようと、様々なことが行われている。そしてその多くが中山間地域と呼ばれる地域であり、そこは高齢化率の高い場所である。そこにいる高齢者や障害者を考えるとその割合は相当なものとなると思う。ならばこの福祉を抜きに地域を考えることはで

きないのではないかとも思う。障害があるにもないにも関わらず、誰もが幸せを目指して生きていける。「満ち足りている」という気持を持てること。その共通点を誰もが理解して、障害者も含めた地域づくりができていけば、「共生」の社会ができていくのではないかと思う。